

『文化財と技術』

第7号

＜特集 ヤマト王権と地域王権／技術の繋がり＞

- 第一部 ヤマト王権と地域王権／技術の繋がり
- 鈴木勉 三角縁神獸鏡製作地論と古墳時代研究
 前田亮 技術と継承 ―その繋がり―
 福井卓造・鈴木勉 ヤマト王権と地域王権の確執
 ―遅らされた技術移転「冶鉄技術」―
 上柁武 岡山県猿喰池製鉄遺跡の製鉄炉と技術継承論
 李東冠・武末純一 百済の鉄と製鋼技術に関する試論
 ―梯形鑄造鉄斧を中心に―
 金跳咏 東北アジアにおける鉄器文化の到来と限冶供鉄政策
 鈴木勉・金跳咏 新山古墳・大成洞古墳群 88 号墳出土
 金銅製帯金具などの円文たがね
- 第二部 古代東アジアの装飾技術
- 沢田むつ代 古墳出土の鉄刀と鉄劍の
 柄巻きと鞘巻きの種類と仕様の事例
 金字大 新羅における垂飾付耳飾の系統と変遷
 李漢祥 皇南大塚北墳嵌玉腕輪の製作工程と製作地
 金跳咏・鈴木勉 皇南大塚北墳出土「夫人帯」銘銀製帯金具の線彫り技術について
 鈴木勉 朝鮮半島三国時代の彫金技術 その 15～19
 その 15 国立慶州博物館・菊隠 collection 大刀の双連珠凸魚々子文
 ―藤ノ木古墳出土鞍金具の出自を求めて―
 その 16 天安龍院里出土龍文環頭大刀の金板圧着技法とは
 その 17 李漢祥「陝川玉田 M3 号墳龍鳳紋大刀の
 環部製作工程」への批判
 その 18 慶尙南道 咸陽郡 白川里 1 号出土大刀のうろこ文の打ち出し
 その 19 全北高敞郡雅山面鳳德里古墳群 1 号墳出土飾履の
 製作技術の疑問
- 第三部 復元研究報告
- 鈴木勉 群馬県山王金冠塚金銅製冠の復元 4～6
 4 新羅の出字形冠 その 2
 5 林堂洞 7 A 号墳金銅製冠
 6 林堂洞 7 C 号墳金銅製冠
- ＜付録＞
- 鈴木勉 三角縁神獸鏡の仕上げ加工痕と製作体制
 (『河上邦彦古稀記念論集』2015 年より転載)

『文化財と技術』第7号 目次

<特集 ヤマト王権と地域王権／技術の繋がり>

第一部 ヤマト王権と地域王権／技術の繋がり

三角縁神獸鏡製作地論と古墳時代研究	鈴木 勉	5
技術と継承 ―その繋がり―	前田 亮	10
ヤマト王権と地域王権の確執 ―遅らされた技術移転「冶鉄技術」―	福井卓造・鈴木勉	32
岡山県猿喰池製鉄遺跡の製鉄炉と技術継承論	上 梶 武	40
百済の鉄と製鋼技術に関する試論 ―梯形鑄造鉄斧を中心に―	李東冠・武末純一	63
東北アジアにおける鉄器文化の到来と限冶供鉄政策	金 跳 咏	78
新山古墳・大成洞古墳群 88 号墳出土 金銅製帯金具などの円文たがね	鈴木勉・金跳咏	101

第二部 古代東アジアの装飾技術

古墳出土の鉄刀と鉄剣の柄巻きと鞘巻きの種類と仕様の事例	沢田むつ代	111
新羅における垂飾付耳飾の系統と変遷	金 宇 大	143
皇南大塚北墳嵌玉腕輪の製作工程と製作地	李 漢 祥	180
皇南大塚北墳出土「夫人帯」銘銀製帯金具の線彫り技術について	金跳咏・鈴木勉	197
朝鮮半島三国時代の彫金技術 その 15～19	鈴木 勉	205
その 15 国立慶州博物館・菊隠 collection 大刀の双連珠凸魚々字文 ―藤ノ木古墳出土鞍金具の出自を求めて―		
その 16 天安龍院里出土龍文環頭大刀の金板圧着技法とは		
その 17 李漢祥「陝川玉田 M3 号墳龍鳳紋大刀の環部製作工程」への批判		
その 18 慶尙南道 咸陽郡 白川里 1 号出土大刀のうろこ文の打ち出し		
その 19 全北高敞郡雅山面鳳德里古墳群 1 号墳出土飾履の製作技術の疑問		

第三部 復元研究報告

群馬県山王金冠塚金銅製冠の復元 4～6	鈴木 勉	223
4 新羅の出字形冠 その 2		
5 林堂洞 7 A 号墳金銅製冠		
6 林堂洞 7 C 号墳金銅製冠		

<付録>

三角縁神獸鏡の仕上げ加工痕と製作体制 (『河上邦彦古稀記念論集』2015年より転載)	鈴木 勉	233
---	------	-----

第二部 古代東アジアの装飾技術

古墳出土の鉄刀と鉄剣の柄巻きと鞘巻きの種類と仕様の事例	沢田むつ代	111
新羅における垂飾付耳飾の系統と変遷	金宇大	143
皇南大塚北墳嵌玉腕輪の製作工程と製作地	李漢祥	180
皇南大塚北墳出土「夫人帯」銘銀製帯金具の線彫り技術について	金跳咏・鈴木勉	197
朝鮮半島三国時代の彫金技術 その15～19	鈴木勉	205
その15 国立慶州博物館・菊隠 collection 大刀の双連珠凸魚々子文 －藤ノ木古墳出土鞍金具の出自を求めて－		205
その16 天安龍院里出土龍文環頭大刀の金板圧着技法とは		208
その17 李漢祥「陝川玉田 M3 号墳龍鳳紋大刀の環部製作工程」への批判		210
その18 慶尙南道 咸陽郡 白川里 1 号出土大刀のうろこ文の打ち出し		214
その19 全北高敞郡雅山面鳳德里古墳群 1 号墳出土飾履の製作技術の疑問		217

国立慶州博物館・菊隠 collection 大刀の双連珠凸魚々子文

—藤ノ木古墳出土鞍金具の出自を求めて—

鈴木 勉

<根岸塾塾生からの質問1>

図1は、慶州博物館の菊隠 collection 大刀の双連珠凸魚々子文です。2枚の銅板で作られているようですが、いかがでしょうか？

<解説1>

「菊隠コレクションの双連珠凸魚々子文」

菊隠コレクションの凸魚々子文と連珠文は、裏からたがねを打ち込んだものですね。この責金具は2枚の銅板を合わせて作られています（図1の矢印部分）。表側の板は、銅板の裏から魚々子たがねで円文を打ち出し、連珠文も裏からたがねを打ち込み表から文様を整えるなどして完成させています。裏側の板は端部を折り返して成形し、表側の板と合わせます。図1の矢印部分を見ると、表側の板と裏側の板が合わさっていることがわかります。とても綺麗な堤状連珠文と凸魚々子文です。

魚々子文や堤状連珠文を裏から打ち出すところは、日本の島根県岡田山1号墳の責金具の凸魚々子文（図2）や藤ノ木古墳出土馬具の鞍金具把手の双連珠凸魚々子文（図3）と同じです。島根県岡田山1号墳の責金具と藤ノ木古墳出土馬具の鞍金具把手は、双連珠文の内側に裏から打ち出して凸線が作られています。菊隠コレクションの方は凸線がありません。

双連珠凸魚々子文ではなく、双連珠魚々子文ですが、宮崎県持田古墳群出土三葉文環頭大刀の責金具（図4）は、双連珠文と魚々子文の間に凹線を入れているかのように見えますが、これは堤状連珠文の「際(キワ)を決める」ためになめくりたがねを打ち込んだと考えることができます。

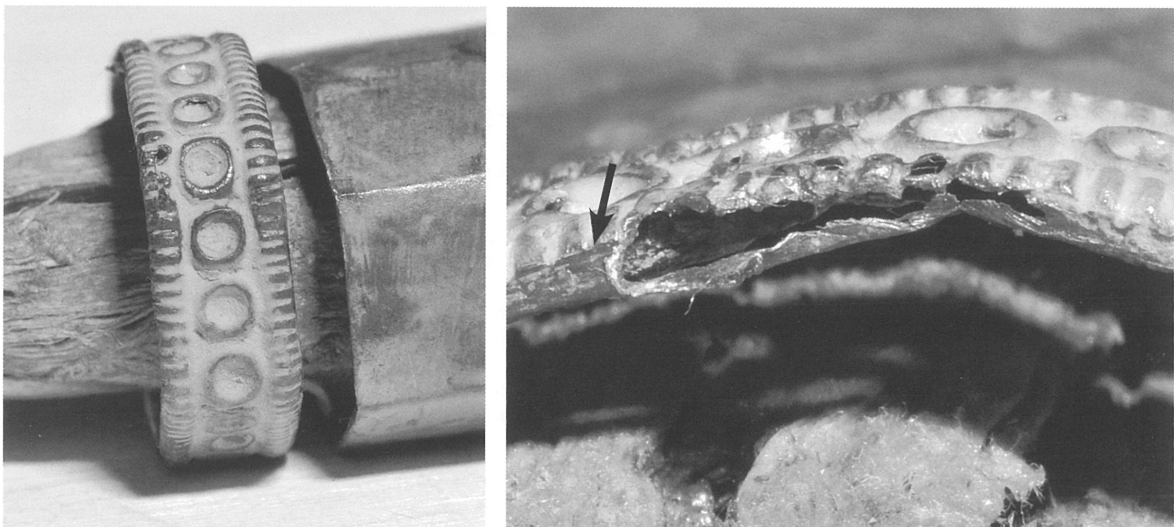


図1 慶州博物館の菊隠 collection 大刀の責金具の双連珠凸魚々子文（左：正面、右：側面）



図2 島根県岡田山1号墳大刀の
責金具の双連珠凸魚々子文



図3 藤ノ木古墳出土馬具の鞍金具把手の
双連珠凸魚々子文

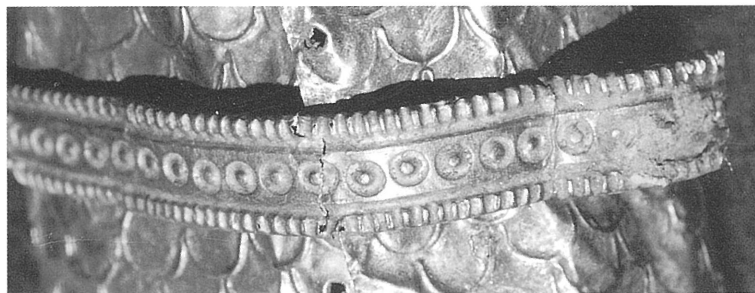


図4 宮崎県持田古墳群出土三葉文環頭大刀の責金具の双連珠魚々子文

「藤ノ木古墳出土鞍金具の双連珠魚々子文」

藤ノ木古墳出土馬具の鞍金具の周縁にある双連珠魚々子文（図5）は、双連珠文と魚々子文の間に1本の凸線が見えます。この凸線は責め金具の技術を見るためのキーワードです。これを詳しく考えてみましょう。

まず、真ん中に魚々子文が打たれています。これは、表側から円文たがねを打ち込んでいるのです。それでは、①凸線は裏から打たれたのでしょうか？、②表から作り出されたのでしょうか？

①凸線を裏から打ち出すには1本のなめくりたがね（打ち出したがね）があれば簡単ですが、凸線を表から作り出すには「彫り崩し」しかありません。「彫り崩し」とは、魚々子文を打ったところの外側をすべて削り取ってしまうのです。これを鋤たがねなどの切削加工で施すとなると大変な手間です。そもそも平らな部分を彫り崩して仕上げるということは彫金ではあまり行いません。平らに仕上げることは彫金の加工ではとても難しい作業なのでできるだけこれを避けます。他に何らかの成形法がないのでしょうか？

藤ノ木古墳出土鞍金具の海金具の裏面を見ると、凸線の裏側が凹んでいません。つまり、藤ノ木古墳出土鞍金具の海金具は裏からたがねで打ち出していないのです。「では？」と考えました。

鈴木は2013年国立扶余博物館で開催された百済シンポジウムで発表をしました¹。その一部で「藤ノ木古墳出土鞍金具の海金具も鑄造で作られたのではないか？」と問題提起しました。以前鈴木は

1 鈴木勉 2013「百済の金属工芸と古代日本 百済の精密鑄造と毛彫り -南北朝・百済から倭への技術移転-」『第59回百済文化祭 国際学術大会 百済金銅大香炉 発掘20周年記念 百済金銅大香炉 古代文化の香を焚く』、後に加筆して、鈴木勉 2014「金工技術から見る南北朝・百済・倭の交渉-百済金銅大香炉・藤ノ木古墳出土馬具をめぐる技術移転-」『文化財と技術』第6号に掲載

鞍金具のうち、磯金具と覆輪と把手下海金具はどれも鑄造で作られていると指摘しています²。この海金具を鑄造で作ってあれば、藤ノ木古墳出土馬具セットの多くが鑄造で作られたこととなります。そうなれば、海金具の双連珠魚々子文の双連珠文の内側の凸線が加工上納得がいくのです。つまり、鑄造で双連珠魚々子文の概略を作っておき、鑄造後たがねで仕上げ加工するのです。仕上げ加工は凸線を整え、魚々子文を打つ地面を平らに仕上げ、双連珠文を整形します。彫金技術は本来鑄造技術の中の仕上げ加工技術として発展してきました。鑄造製品の最後の仕上げ加工が彫金技術の本来の仕事なのです。藤ノ木古墳出土馬具の障泥の双連珠凸魚々子文(図6)は、私はこれも鑄造ではないかと考えているもので、見た目も上記の責金具などとは異なっています。これも裏から打ち出した痕跡はありません。

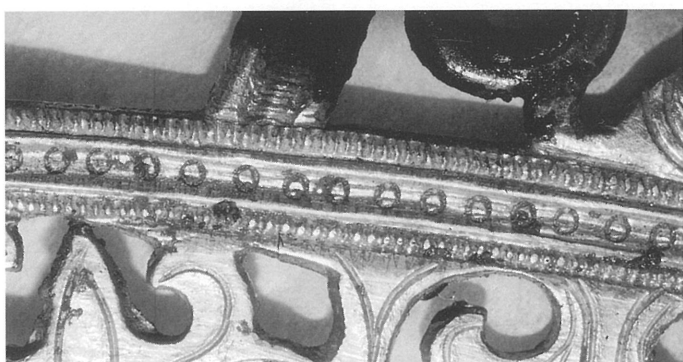


図5 藤ノ木古墳出土馬具の鞍金具の双連珠魚々子文と凸線

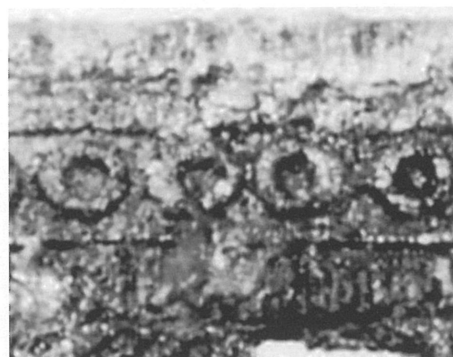


図6 藤ノ木古墳出土馬具の障泥の双連珠凸魚々子文

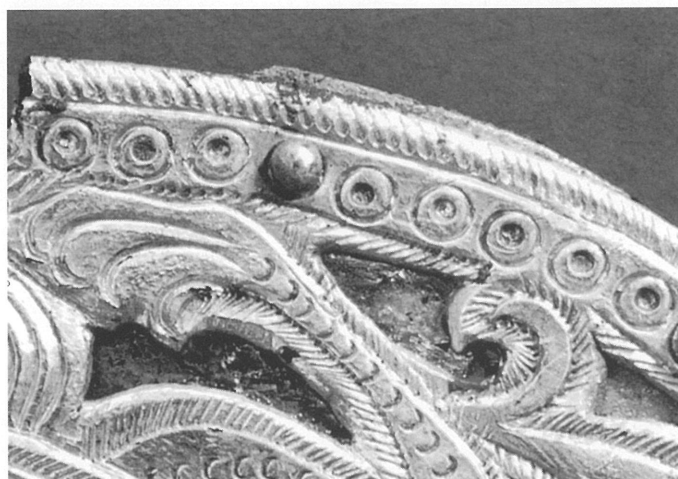


図7 藤ノ木古墳出土馬具の龍文飾り金具の双連珠凸魚々子文

「藤ノ木古墳出土金銅製品の凸魚々子文」

藤ノ木古墳出土馬具Aセットにはあちこちに凸魚々子文が使われています。龍文飾り金具(図7)、鞍金具把手の縁、円形飾り金具などにあります。これらの双連珠凸魚々子文を見ると、その構成はそれぞれ異なっていることがわかります。これらは彫金技術で作られています。

以上のように藤ノ木古墳出土馬具には沢山の凸魚々子文が使われていて、鑄造製のものも、彫金製のものもあると考えられます。同時期の他の金銅製品とは異なる様相を見せていると言えます。その系譜的な出自を考える大きな要素になるでしょう。

2 勝部明生・鈴木勉 2003「藤ノ木古墳出土馬具の源流を辿る」橿原考古学研究所論集 14

文化財と技術 第7号

2015年12月1日 印刷

2015年12月1日 発行

編集	鈴木 勉
発行	特定非営利活動法人 工芸文化研究所 所長 鈴木 勉
発行所	特定非営利活動法人 工芸文化研究所 所長 鈴木 勉 東京都台東区根岸5-9-19 (〒110-0003)
印刷	千葉刑務所 千葉県千葉市若葉区貝塚町192 (〒264-8585)